

ノグチゲラ

やんばるの森に暮らすキツツキ

学名 : *Dendrocopos noguchii*
英名 : Okinawa Woodpecker
方言名 : キータチャ、キーチチャ
全長 : 約 30cm 体重 : 約 140g

国内希少野生動植物種(種の保存法)

国指定特別天然記念物(文化財保護法)

絶滅危惧IB類(EN)(環境省第5次レッドリスト)

危機(EN)(IUCNレッドリスト)

沖縄県の県鳥、東村の村鳥

ノグチゲラってどんな鳥？

ノグチゲラは沖縄島の固有種で、1887年に新種として発表されました。現在は、沖縄島北部のやんばると呼ばれる地域にのみ分布し、イタジイ(スダジイ)が優占する常緑照葉樹林に生息しています。

ノグチゲラの和名や学名(*Dendrocopos noguchii*)は、発見に関わったノグチさんに由来するといわれています。



常緑照葉樹林の森にすむ

どんな見た目をしている？

オスの頭頂部は赤い



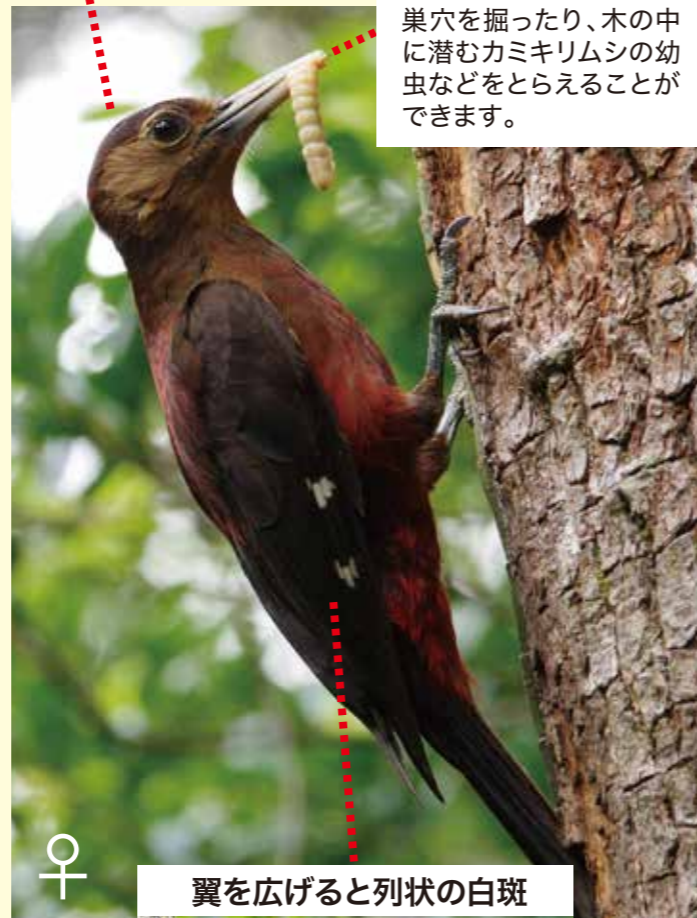
体を支えるための丈夫な尾羽
足と尾羽の三点支持で木の幹に垂直にとまることができます。

ノグチゲラの足型(左足)

対趾足(たいしそく)と呼ばれる、指が前2本、後ろ2本に分かれる形で、幹をがっしり掴みます。



メスの頭頂部は黒い



のみのような鋭い嘴
巣穴を掘ったり、木の中に潜むカミキリムシの幼虫などをとらえることができます。

翼を広げると列状の白斑



どんなエサを食べる？

ノグチゲラは雑食で、昆虫やクモを始めとする動物質のエサから、イタジイやイヌビワといった果実、デイゴの花の蜜など、多様な植物質のエサも利用します。植物質のエサ資源は、季節に合わせて多様な種類を利用することがわかっています。



オキナワトタテグモ



デイゴの花蜜



イタジイの実



ヤマモモの実

月毎の植物質エサ表

	1月	2月	3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月
ヤマモモ					●	●						
イタジイ (スダジイ)	●				●				●	●	●	
マテバシイ												●
イヌビワ						●	●	●				
イタピカズラ							●	●	●			
ヒメイタビ					●	●	●	●	●	●		
シマグワ				●	●					●		
タブノキ					●	●	●					
ポンカン											●	●
タンカン	●	●										●
ウンシュウミカン							●	●	●	●		
アカメガシワ							●	●				
ハゼノキ							●	●	●	●		
ヒサカキ							●					
クダモノトケイソウ							●					
デイゴ (花蜜)					●							

雌雄のエサの違い

ノグチゲラのメスは樹上でエサを採ることが多く、主に木の中に潜むカミキリムシの幼虫などを捕まえます。一方で、オスは頻りに地上において土を掘ってエサを採り、地表性のクモやセミの幼虫などを捕まえます。

雌雄が主な餌場を地上と樹上ですみ分けることで、狭い範囲でより多くのエサを採ることができます。雌雄で主要な餌場を地上と樹上ですみ分けるキツツキは、世界でもノグチゲラのほかに知られていません。

やんばるの森には従来、肉食性哺乳類が生息しておらず、オスが地上採餌をするという独自の進化を遂げたと考えられています。地上での採餌の際に、林床の色に溶け込む羽色をしています。



カミキリムシの幼虫



セミの幼虫



地上において林床に紛れ込むノグチゲラ→

ノグチゲラ保護増殖事業による調査

ノグチゲラの保全のため、環境省では「ノグチゲラ保護増殖事業計画」(1998年策定)に基づき、繁殖行動や寿命などの基礎的な情報を得るための調査や、生息状況の変化を把握するためのモニタリング調査を実施しています。

標識個体の追跡調査

どの個体が識別できるよう、個体ごとに色の組み合わせを変えたプラスチック製の足環や、番号の記載された金属製の足環(メタルリング)を装着します。また、個体の情報を知るため、計測や遺伝的多様性を調べるための血液採取、ダニ採取などを行います。



足環のついたノグチゲラ



計測の様子

これらの標識個体を追跡し、行動範囲や個体の寿命、繁殖成功率、繁殖失敗要因など、ノグチゲラの生態について調査を実施してきました。

標識個体の第一号はメスの成鳥でした(両足黄色カラーリング:通称キー子)。その後、第二号のオス(両足橙色リング:通称ダイ)とペアになり、標識したその年に繁殖を確認しました。



第一号のメス “キー子”



第二号のオス “ダイ”

生息状況のモニタリング

・ラインセンサス法

あらかじめ決められたルートに沿って、ノグチゲラの出現回数や巣木の位置を記録し、行動範囲や繁殖状況の経年変化などを把握しています。



ラインセンサス調査の様子

・プレイバック調査

音声再生装置と拡声器でノグチゲラの鳴き声を流し、鳴き返しがあつた声について、個体数、日時、調査地点からの方角および距離を記録します。この調査を毎年実施することで、分布域の経年変化を把握しています。環境省では、森林総合研究所が沖縄県立辺土名高校の生徒や地域と連携しながら実施してきたプレイバック調査を2017年に引継ぎ、現在も地域と連携しながら毎年調査を実施しています。



プレイバック調査の様子

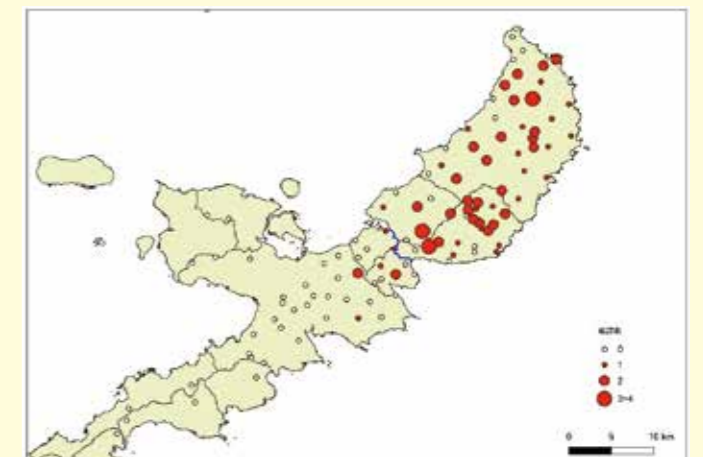


辺土名高校サイエンス部との合同調査

調査は、国頭村からかつての分布域だった恩納村までの約100地点で実施しています。近年ノグチゲラの分布域がやんばる3村(国頭村、大宜味村、東村)に限らず、南の名護市まで回復してきていることがわかっています。



2017年度調査結果



2024年度調査結果

調査地点と鳴き返しのあつた回数を図に示すと、ノグチゲラの生息域の南限が見えてきます。

ノグチゲラの暮らし

つがいの形成

ノグチゲラはひとたびペアを形成すると、相手がいなくなる限り同じペアで繁殖することが観察されています。標識個体であるオスのダイとメスのキー子は1999年、2000年に繁殖しました。2001年からキー子が見られなくなり、別の標識個体であるシセイというメスとペアになりました。2001年から2008年までこのペアは繁殖に成功し、2009年は繁殖に失敗したためペアの確認も出来ませんでした。2010年には再び繁殖しました。



巣穴掘り

春、繁殖のために木の幹や枝に巣穴を掘ります。巣穴掘りはオスとメスが共同で行います。巣に使われる木はイタジイ(スダジイ)の他、ニッケイやタブノキ、イスノキ、人里近くの森では、センダンのほか、ハンノキやリュウキュウマツの枯れ木なども使われます。

巣穴掘りには数週間~1ヶ月の時間を要しますが、長いものでは12月頃からコツコツと掘り進めて春に巣穴を完成させたペアもいます。



リュウキュウマツの枯れ木に巣穴を掘るオス

産卵とヒナの誕生

巣穴が完成すると次は産卵です。1回の繁殖で4個程度の卵を産みます。日中はオスとメスが交互で卵を温めますが、夜はオスが温めます。

産卵から2週間ほどでヒナが誕生(ふ化)します。ふ化したばかりのヒナはまだ羽毛が生えそろうていないので、体温調節がうまくできません。このため、日中はオスとメスが交互でヒナの温めとエサやりを行います。夜間はオスが巣に残り、ヒナを温めます。



掘りたての木屑の巣座に産み落とされた卵



ふ化直後のヒナ



生後2週間程度のヒナ

子育てとヒナの成長

親鳥は子育てのため、しきりにエサを運びます。メスは樹上、オスは地上とエサ場を分けることで、狭い範囲でも十分なエサをヒナに与えることができます。ヒナは成長して大きくなると巣の入口から顔をのぞかせるようになります。ノグチゲラのヒナの頭頂部は、オスもメスも赤いのが特徴です。



巣口で餌を待つ頭の赤いヒナ

巣立ち

ヒナは卵からふ化して4週間ほどで巣立ちます。巣立つヒナは2羽ほどと少なく、巣立った後もヒナはしばらくは親と一緒に過ごし、秋頃に独り立ちしていきます。

ただ、すべてのヒナが無事に巣立つとは限りません。大雨で巣が水没したり、台風で営巣木が倒れてしまったり、アカマタやハシブトガラスに捕食されてしまうなど、繁殖に失敗することもあります。



巣立ちした幼鳥



台風で倒れた営巣木

~巣の再利用~

ノグチゲラの掘った巣穴は、リュウキュウコノハズクやシジュウカラ、ケナガネズミなどに利用されることがあります。ノグチゲラは、やんばるの森の動物たちにすみかをつくる重要な役割を果たしています。

巣を再利用するシジュウカラ



行動圏

12年間にわたる同一個体の追跡調査で、ノグチゲラはわずか約4haの範囲内で営巣することがわかってきました。このことから、一度営巣すると定着性が非常に高いことが明らかとなりました。これは、オスが地上に採餌場所を拡大し、土を掘って餌を採るようになったことや、四季折々に多様な植物質の餌を利用することも理由の一つと考えられます。

寿命

これまでに確認された標識個体の最高齢は2007年3月に1歳で捕獲されたメスで、16歳まで生存したことが判明しています。この個体は2022年まで繁殖が確認されました。オスの最高齢は、2001年3月に3歳以上の成鳥で捕獲された個体で、少なくとも14歳まで生存したことが確認されています。

ノグチゲラへの脅威

保護の取組と成果

生息地の減少

森林伐採による生息地の減少は、昭和時代に深刻な問題でした。ダムや林道、農地の開発、木材の生産などによる森林伐採のため、ノグチゲラの生息環境が縮小、分断化され、分布域が後退していきました。



ダムの建設

外来種問題

やんばるの森には従来、肉食性哺乳類が生息しておらず、オスの地上採餌など独自の生態を持つノグチゲラが進化してきたと考えられています。しかし、やんばるの森では特定外来生物のファイリマングースや侵略的外来生物のネコ、イヌが侵入し、それら肉食性哺乳類から身を守る術を持たないノグチゲラややんばるの生きものたちが捕食されています。



ファイリマングース



マングースの胃の中から見つかったノグチゲラの羽



ネコ

その他の人為的影響

窓ガラスへの衝突

鳥類が窓ガラスに衝突し、死傷する事故がおこっています。ノグチゲラも毎年数件の衝突事故が起こっており、窓ガラスに光が反射し鏡面状になってしまうことなどが原因と考えられます。



交通事故で負傷し道路脇にうづくまるノグチゲラ

ロードキルの問題

ノグチゲラの交通事故も毎年数例確認されています。

観察による影響

観察や撮影のために巣に近づき過ぎたり、待ち構えたりすると、ノグチゲラが営巣や子育てをやめてしまうことがあります。



ノグチゲラの巣穴をのぞき込むハシブトガラス

ゴミの影響

ゴミ問題は、誤食やマイクロプラスチックの問題など、生物に様々な影響を及ぼしますが、その1つに、ゴミもエサとするカラスの増加があります。カラスが巣やヒナを襲う様子も観察されており、捕食圧の増加が問題となっています。

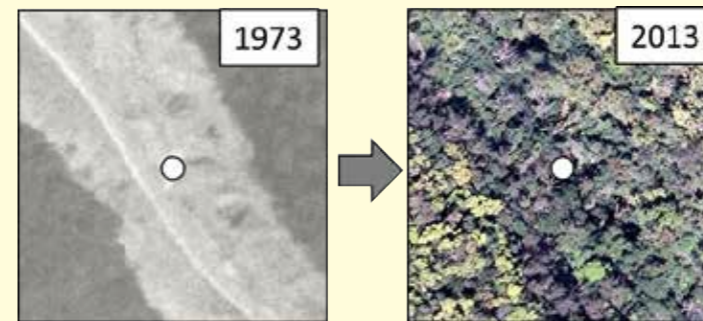
わたしたちにできること

- ペットは最後まで責任をもって飼いましょう。
- 法定速度を守り、安全運転を心がけましょう。
- 営巣中の巣には近づかず、双眼鏡や望遠鏡を使い、離れた場所から観察しましょう。
- ゴミは家に持ち帰りましょう。

森林の回復と生息地の保全対策の進展

1990年代以降、地域住民や林業者のノグチゲラ保護への理解と協力が広がり、ノグチゲラの営巣可能な森林が回復してきています (Kotaka et al., 2021)。

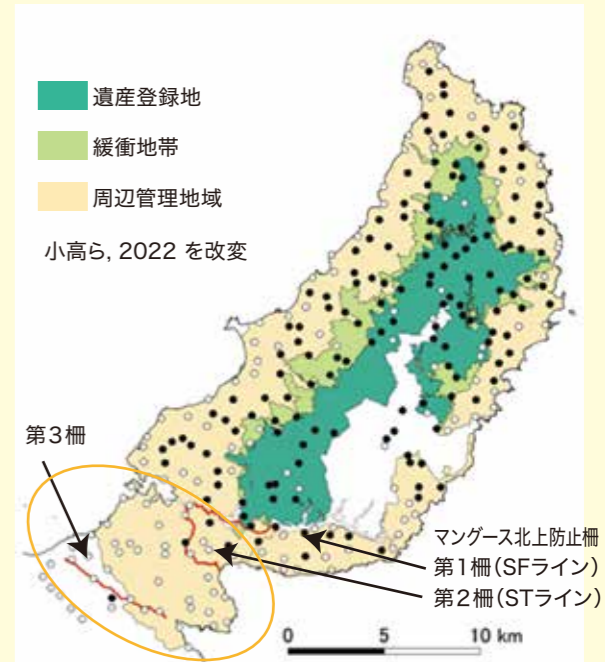
国立公園指定や、世界自然遺産登録により、やんばるの中心部の森一帯が連続した保護区となり、ノグチゲラの主要な生息域の保全が進展しました (小高ら, 2022)。



Kotaka et al., 2021 JFR を改変

○ 営巣地 50m

ノグチゲラの営巣地(2005年度)伐採当時(1973年)と2013年の比較



沖縄島北部の世界自然遺産のゾーニングとノグチゲラの繁殖分布(2019年度)(●在○不在)

外来種問題

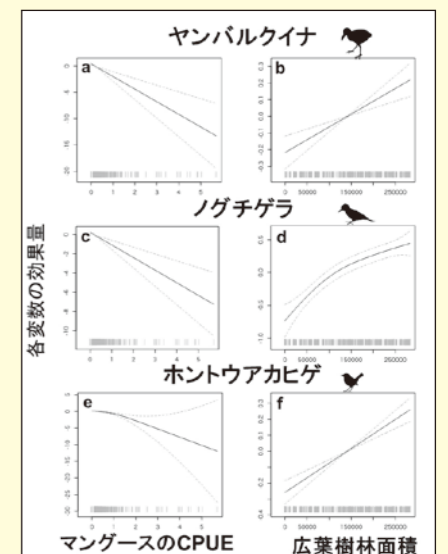
イヌ・ネコ対策

環境省と沖縄県では森の中のイヌやネコの捕獲を行っています。また、国頭村、大宜味村、東村ではネコの適正飼育に関する条例を制定し、ネコを飼う時の飼養登録や室内飼養などを定めています。

マングース防除

南からの侵入を防止する3つの北上防止柵を設置し、環境省と沖縄県で連携して柵の北側でわなによる捕獲や探索犬による糞や生体の探索を実施しています。

2007年から3年ごとに実施された調査では、マングース防除事業が進むことで、ノグチゲラ、ヤンバルクイナ、ホントウアカヒゲの固有鳥類が回復していることが確認されました。また、3種ともにマングースが少なく、広葉樹林面積が広い地域に多いことが統計的に明らかとなりました。(Yagihashi. et al., 2021)。



傷病個体の救護・死因究明

窓ガラス衝突やロードキル等で負傷した個体は救護し、獣医さんの治療によって回復した個体は野生に返しています。死んでしまった個体も回収し、死因を究明することで、対策に役立っています。

高江小学校での放鳥の様子→



窓ガラスへの衝突対策

野鳥が窓ガラスを認識しやすいよう、窓に縦縞やドット柄のテープを貼ること、カーテンを設置することで一定の効果があるとされています。衝突事故の多発地点では再発防止策をお願いしています。

バードストライク防止用の縦縞テープ例→



推定個体数について*

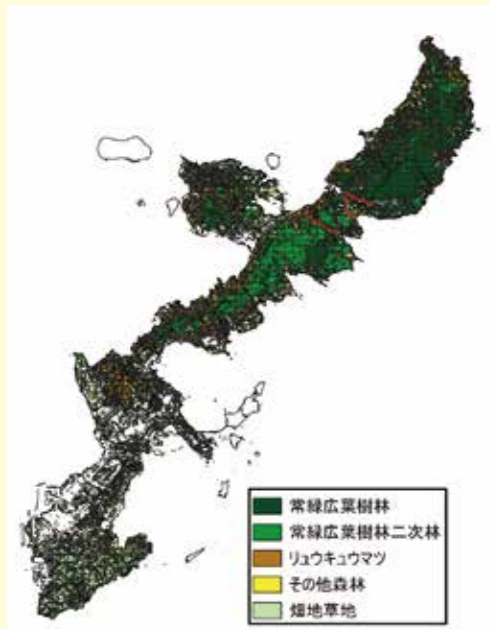
潜在生息密度マップの作製

ノグチゲラの繁殖には、森林の面積とマングースの密度が強く影響します(Yagihashi et al., 2021)。ノグチゲラの営巣木密度の調査結果から(Kotaka et al., 2021)、タイプの異なる森林(常緑広葉樹林、広葉樹二次林、リュウキュウマツ林、その他森林)の営巣木密度を計算し、沖縄島全域を対象に、ノグチゲラの潜在繁殖密度マップ(一夫一婦制なので営巣木密度を2倍したもの)が作製されました。

繁殖個体数の評価

STライン以北では、森林の回復とマングース対策の進展により、ノグチゲラが安定して繁殖できる状態になってきています(小高ら,2022)。作成した潜在繁殖密度マップから、STライン以北のノグチゲラの繁殖個体数は、約882羽(95%信頼区間515羽~1249羽)生息すると推定されました。

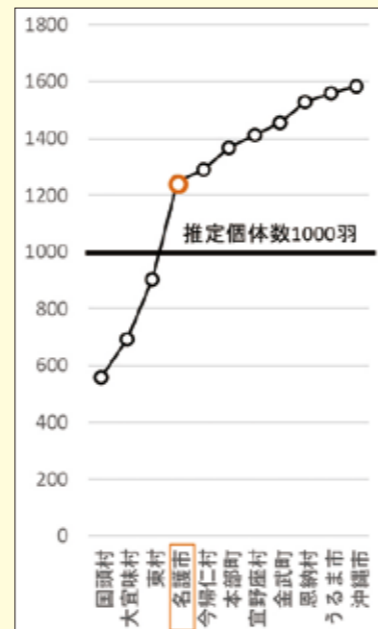
近年、STライン(第2北上防止柵)から第3北上防止柵におけるマングース防除が進展し、この地域でのノグチゲラの確認率が高まってきています。また、マングース防除対策が行われていない名護市の森林においても、北部からの分散個体と思われるノグチゲラの確認事例が増加しています。名護市内では、まだ継続的に繁殖が確認される安定した生息地は見られませんが、将来、名護市内からマングースの排除に成功した場合は、潜在的に約357羽(95%信頼区間249羽~465羽)の繁殖個体が生息できると推定されました。その場合、累積したノグチゲラの繁殖個体数は安定的に1000羽を超えると推定され、本種の絶滅リスクは大きく低減すると期待されます。



自然環境調査(vg67)を基に作成した森林植生マップ



森林植生マップに基づき作成したノグチゲラの潜在繁殖密度マップ



沖縄島の北部市町村から沖縄市まで累積したノグチゲラの潜在的な繁殖個体数

奄美大島でのマングース根絶と沖縄島における今後の展望

2024年、沖縄島北部の遺産地域の約3倍の面積を持つ奄美大島で、マングースの根絶宣言が出されました。奄美大島ではケナガネズミ、アマミトゲネズミ、アマミノクロウサギ、アマミヤマシギ、オオトラツグミ、アカヒゲ、アマミシカワガエル、オットンガエル、アマミハナサキガエルなどの固有種が劇的に回復しています。そして、何より素晴らしいのは、奄美大島ではもうマングースを捕獲する必要がなくなったということです。沖縄島でも、マングース防除の進展に伴い、固有鳥類3種をはじめ多くの固有種が回復の兆しを見せ始めています。沖縄島全域からのマングース根絶に向けた課題を解決するための研究や取り組みを始める時期にきています。

ノグチゲラの保全の歴史

1887	ノグチゲラの発見(新種として記載, Seebohm, 1887)
1955	琉球政府の天然記念物に指定
1977	国指定特別天然記念物に指定(文化財保護法)
1991	環境庁(当時)版レッドデータブック刊行 絶滅危惧種(E)に分類 ※その後の改訂、カテゴリー区分の変更に伴い絶滅危惧IA類(CR)に変更
1993	国内希少野生動植物種に指定(絶滅のおそれのある野生動植物の種の保存に関する法律)
1994	IUCNレッドリストにおいて深刻な危機(CR)に分類
1998	ノグチゲラ保護増殖事業計画を策定 (絶滅のおそれのある野生動植物の種の保存に関する法律)(環境庁、農林水産省)
1999	やんばる野生生物保護センター開館(環境庁)
1999	ノグチゲラの標識捕獲・追跡調査を開始
2000	マングースの捕獲事業を開始(沖縄県)
2001	マングースの捕獲事業を開始(環境省)
2005	ネコの愛護及び管理に関する条例施行(国頭村・大宜味村・東村)
2005	特定外来生物による生態系に係る被害の防止に関する法律施行(環境省)
2005	マングースが特定外来生物に指定 (特定外来生物による生態系に係る被害の防止に関する法律)
2006	マングース北上防止柵設置(沖縄県)
2010	ノグチゲラ保護条例施行(東村)
2011	やんばる国頭村森林地域ゾーニング計画策定(国頭村)
2013	「やんばる型森林業の推進～環境に配慮した森林利用の構築を目指して～施策方針」決定(沖縄県)
2016	生息地の一部がやんばる国立公園に指定(自然公園法)
2017	ノグチゲラ保護増殖事業10ヵ年実施計画策定(環境省)
2017	生息地の一部がやんばる森林生態系保護地域に設定
2021	生息地の主要な森林が「奄美大島、徳之島、沖縄島北部及び西表島」として世界自然遺産に登録
2023	ずっとやんばるずっとうちネコアクションプラン 沖縄島北部における生態系保全等のためのネコ管理・共生行動計画策定(沖縄県、国頭村、大宜味村、東村、環境省)
2024	IUCNレッドリストにおいて深刻な危機(CR)から危機(EN)に1段階改善
2026	環境省第5次レッドリストにて絶滅危惧IB類(EN)に1段階改善

* 小高ら, (2025) 日本鳥学会大会口頭発表より



制作：環境省 やんばる自然保護官事務所(国頭村字比地263-1)

TEL:0980-50-1025

監修：ノグチゲラ保護増殖事業ワーキンググループ

写真提供：渡久地豊、小高信彦、一般財団法人 沖縄県環境科学センター、岡久雄二、佐々木健志

発行：2026.3